頑張ってますシリーズ　その5

地域協業の現状と将来展望

－森林（もり）に生まれ，森林に育ち，森林と共に生きる－

丸善木材株式会社代表取締役会長　鈴木通夫

平成８年９月19日に，旭川市において開催された社団法人日本木材加工技術協会第14回年次大会で，「21世紀の地域木材産業を考える」と題する特別講演会が行なわれました。
主催された社団法人日本木材加工技術協会並びに，ご講演されました丸善木材株式会社代表取締役会長・鈴木道夫氏のご了承をいただきまして，掲載いたします。
なお，ご講演内容が本誌の［頑張ってますシリーズ］に相応しいので標題を入れさせていただきました。次号は，株式会社サトウ代表取締役社長・秋元紀幸氏のご講演を掲載させていただきます。

地域の概況

北海道東部，釧路管内の厚岸町と浜中町からなる厚浜地域は森林面積が53,000ha，所管別では国有林が17,000haで32％，道有林が10,000haで19％，一般民有林が26,000haで49％という構成である。ここから一年間に生産される原木の量は４万㎥程度だが，数年前に飛弾の林業地を訪ねたところ，そこでは同じような面積で年間30万㎥という生産量であった。それに比べいかに厚浜地域が森林資源に恵まれない地域になってしまっているか分かる。人工林面積が２万ha，これは人工林率にして38％で全道の平均を11％ほど上回る。地域の加工産業としては，製材工場６，木材加工１，集成材工場１，ログハウス・円柱材加工２，床柱１，合計11の工場が稼動している。厚浜地域は厚岸木材工業，厚浜木材加工，東部森林整備事業の３つの協同組合と，両町の森林組合などが緊密な連係を取り地域一帯となり協力している，という評価を受けている。

協業化への歴史

昭和38年ころ，道有林厚岸林務署から立木素材買い受けの合理化や地域内製材工場の統廃合，造材業の集約化などの指導を受けた。そこで，厚岸林産協同組合と厚岸林業振興協同組合の２つの協同組合が設立されたが，相変わらず協同事業とは名ばかりの個別分散的な状態でほとんど造材の集約化はなされなかった。40年代中ころ，素材は組合にまとめて受け渡されることになり，ようやく集約させるを得ない背景ができた。しかし製材と造材の切り離しがどうしても実行できず，厚岸林産協同組合から数社が脱退して，厚岸林業振興協同組合へ再加入したのである。その際，名称を厚岸木材工業協同組合（厚木協組と略）と改めた。これが厚浜地域の親組合となり，厚岸町内の製材工場を統廃合して組合直営の製材工場の建設を決定し，同時に造材と製材業を分離した。設立当初，48年を操業開始目標にして集めた約5,000㎥の丸太が石油ショックで大きく値上がりしたこともあり，新しい組織のスタートは順風満帆であった。50年には厚岸林産協組が厚木協組と合併した。

このころすでに，厚浜地域の道有林資源量は急速に悪化しており，残された低質の広葉樹や間伐材の利用が地域の重要課題になってきていた。そこで対応策として集成材の事業への進出を決めた。最初は針葉樹の集成材工場を作ったが見事に失敗し，広葉樹の集成材に切り替えた。他に，組合員の工場には円柱材や銘木の集成材加工などを勧めて地域全体で５億５～６千万円の設備投資を行った。しかし，組合の経営はあまり改善されなかった。加えて組合員工場に配材する原木の質の低下，価格落下等々があり，各組合員の経営も赤字が累積する状況となっていった。55年から始まった木材不況に突入したのである。地域の原木は年を経るごとに低質・小径化し，また有用広葉樹の減少も続いた。このまま放置すれば地域から製材工場もチップ

工場も消滅するのは時間の問題，という危機的状況になり，何か付加価値の高い商品化を仕掛ける必要に迫られた。53年以来，円柱材加工の事業を通して北海道立林産試験場と情報交換をしていたところ，ログハウス事業の話がありそれを対応策とした。幸いに，北海道に林産構造改善事業として支援していただき，58年には厚木協組に両町の森林組合を加えて厚浜木材加工協同組合（厚浜協組と略）という別組織を誕生させた。そして日本初のログハウス専門工場が59年に創業開始，ログハウス事業は順調に進み，62・63年ころには累積赤字のあった製材工場はみな黒字に転換をするまでになったのである。

こうして協同事業の健全化に成功したことから，今後の地域林業・林産資源の造成を目的として東部森林整備事業協同組合という組織を起ち上げ，200ha余りの林地を得て造林を開始した。その後は組合員も林地

概　　要

名　　称　厚浜木材加工協同組合
所 在 地　北海道厚岸郡浜中町大字琵琶瀬村字茶内429番1
創　　立　昭和58年5月27日
資 本 金　47,000,000円
従業員数　23名
決 算 期　3月
事　　業　ログハウス建築，部材生産販売
　　公園遊具資材　パネルボード　ウッドポールフェンス
　　木材防腐，木材乾燥
規模・設備　敷地　10,586平方メートル
　　工場　第一工場　鉄骨造　2階建
　　840.48㎡，ログ部材生産，パネルボード生産，防腐施設。
　　第二工場　木造　平家建
　　350.02㎡，パレット生産，諸加工作業場
　　第三工場　木造　平家建
　　387.07㎡，たて継ぎ製材生産。
　　第四工場　木造　平家建
　　184.32㎡，研磨工場，帯鋸，チップソー，カッター類研磨

組合員名簿

企業名	代表者名	住所	電話番号
厚岸町森林組合	伊藤　正敏	厚岸町字真栄町1条	0153-52-3131
厚岸木材工業㈱	近藤　克己	厚岸町字住の江町10	0153-52-2633
石嶋木材店	石嶋　勲	厚岸町字奔渡町31	0153-52-2393
㈱イチムラ	鈴木　通夫	浜中町字茶内	0153-65-2170
コウノウ建設㈱	太田　孝	浜中町字茶内	0153-65-2341
近藤林業㈱	近藤　克己	釧路市新栄町10	0154-22-1138
真栄木材㈱	伊藤　正敏	厚岸町宮園町138	0153-52-7135
鈴木木材工業㈱	鈴木　勝英	浜中町大字霧多布	0153-62-2022
菅原製函㈱	菅原　政宏	厚岸町字奔渡町	0153-52-3272
㈱中嶋木材	中嶋　嘉昭	釧路町桂5	0154-36-1967
浜中町森林組合	伊藤　秀麻	浜中町字茶内	0153-65-2111
浜中チップ工業㈱	鈴木　通夫	浜中町字茶内	0153-65-2170
横井林業㈱	千葉　昌一	厚岸町字宮園町149	0153-52-2615
丸善木材㈱	鈴木不二男	釧路町桂4	0154-37-1561

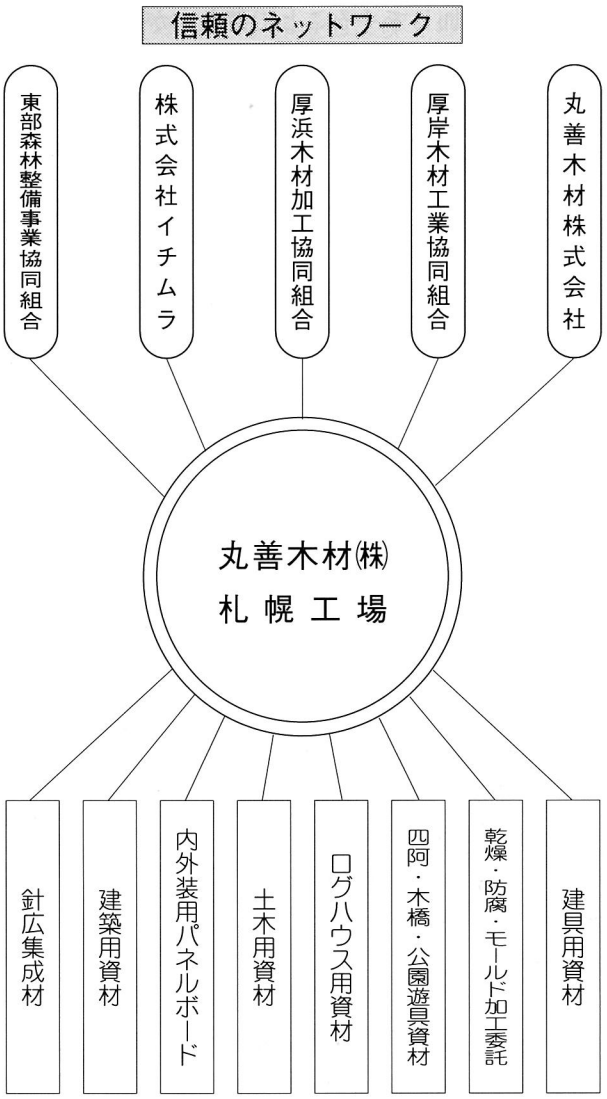
を買いその管理を行っており，現在は合わせておよそ500haを管理している状況である。造林・育林業務は両町の森林組合が行っている。

新事業への展開

こうして厚浜地域も協業を広げてきたが，その後も赤字の累積とそれからの脱却の繰り返しを続けてきたことから，平成に入り地域の森林や林業・林産業がこれからどうあるべきか，その方向性について計画を立てた。

まず，林業部門では高性能林業機械の導入等によってその当時3社でやっていた造材業を1社に集約すること。製材業については魚箱の仕組み材，集成材の原板，あるいは建築基礎資材など品目別，原料別の特化・専門化を図る。また，原木の集荷を一元化し，個々の製材工場は原木の在庫を持たないようにした。他に，表面化してきた熱帯雨林問題を受け，ラワンの代替材として針葉樹の集成材工場を再び造ることにし，加えて厚木協組のログハウス事業で使用する大断面集成材も作る方向で立案した。このように生産施設が整ってくると当然その販売先，販路を確保していかなければならないため，道央圏に加工と販売の拠点を設ける。これらの製品を長く生産していくためには設計事務所と協力して木質構造への理解を広めていく必要があり，そのための機関として木質構造開発協議会を設立する。

およそこうした内容の計画に基づき，北海道に協力してもらい地域診断をした。組合員の個別調査や意識調査も行い，平成3年にその結果の報告として「計画はぜひ実行すべきである」という答申が出された。早速，道央圏の加工・販売拠点は丸善木材に担当させ，石狩町（現石狩市）新港に5億円の設備投資をした他，あわせて他の組合員工場にも乾燥機を置くなど，これを支援した。厚木協組も，製材工場から出る端材をたて継ぎする施設や新たな用地の取得など2億円くらいの設備投資を行うなど，地域全体がそれぞれ動きはじめたわけである。計画の中でも重要であったのは厚木協組の集成材事業で，北海道と相談をして林業構造改善事業として4年から8年にかけ，約11億5千万円くらいの設備投資が完了した。集成材も順調に生産が始まり，それをどう売っていくか考える必要があった。ただ製品を販売するのではなく自ら建てて供給しようと考え，平成7年には厚浜協組が釧路に建築事業部を設置した。木質構造開発協議会の設計グループによる



様々な面での支援にも助けられて昨年1年間で12棟の分譲住宅を建てた他，病院や幼稚園，体育館など受注を広げ，なんとか建築事業部も年間5～6億円の売り上げになってきている。10年前，厚浜協組と厚木協組で売り上げが9億6千万円ほど，その他の木材会社も含めて全体で約26億円くらいの売り上げであった。この平成7年度の売り上げは共同組合全体が17億円ほど，地域全体で合わせて約45億円と，成長量は少ないながら確実に10年前と比べて1.7倍程度の状況となっている。以上がこの地域の協同事業の変遷である。

協業の戦略

地域協業，言い換えればグループ化への戦略は段階を経て今日に至っていると考えている。第1の段階は地域内，釧路管内での同業者との競争にいかに勝つかである。具体的には，グループ化の中で生産施設が整

い生産量も増加してくることで競争力がつき，即納が可能な体制となった。結果，量・価格におけるイニシアティブを持つことにより地域内の価格競争の排除に成功している。第2段階では他地域の同業者との競合があるが，独自の商品，ログハウスや公園遊具資材，ウッドポールフェンスなどの開発能力・競争力に加え，設計事務所との協力関係の構築による提案機能の向上を背景にして他地域との競合に優位性を持っている。現在は第3段階に入っており，国際的な価格競争の中で生き残っていかなければならない。海外の安価な製品との棲み分けを意識しつつ，どう対峙していくのか，また新しく取り込める技術や工法はどんどん吸収していく方向に，と考えている。

丸善木材の行動指針として，「木に関する限り我々に不可能はない」「即納をモットーとする，それは顧客への最大のサービスである」「付加価値を高めること」がある。この3つの行動指針は木材に関してはプロ集団という志向と，顧客満足の志向，また企業の永続性の志向であり，常に忘れずにいなければならないものと思っている。

将来展望

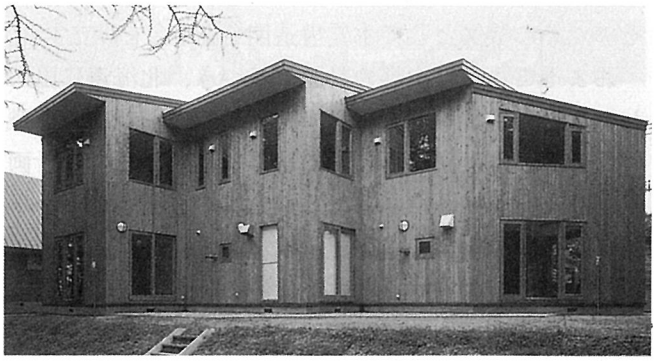
北海道でもチッパーキャンターと帯鋸を組み合わせた製材工場のラインが出来ているが，厚浜地域でもそういった高能率の生産方式を考えざるを得ないと思われる。少し方法は違うが，製材工場にチップ工場の併設をし，チップを取った半製品から加工するための工場を考えている。そして現在の製材工場を幾つか減らす。こうした高能率化にあわせ，ラインの自動化・無人化を実現しながら低コストの商品群を生み出していく，それが国際的な価格競争の中で生き残る上で必要なことであろう。こうした低価格商品をテコにして，クレテック金物などメタルジョイントを用いた工法による住宅市場を，地域の工務店などと提携しながら広めていく。また特に，木質産業廃棄物のリサイクルセンターを何としても作らなければならない，と強く感じている。ＣＣＡ処理をしてある廃木材を再利用や再処理するための施設を作っておかなければ，ＣＣＡが拒絶されるという危機感を持っている。よって再利用の方法として歩道資材や暗渠疎水材に使用できないのか，製紙原料やボードなどへの可能性はないのか等，色々と考えている。厚浜地域では全道に防腐処理資材を納めている関係上，ＣＣＡ処理の問題についてはぜひ様々な（再利用や処理方法についての）研究が行われることを希望している。

おわりに

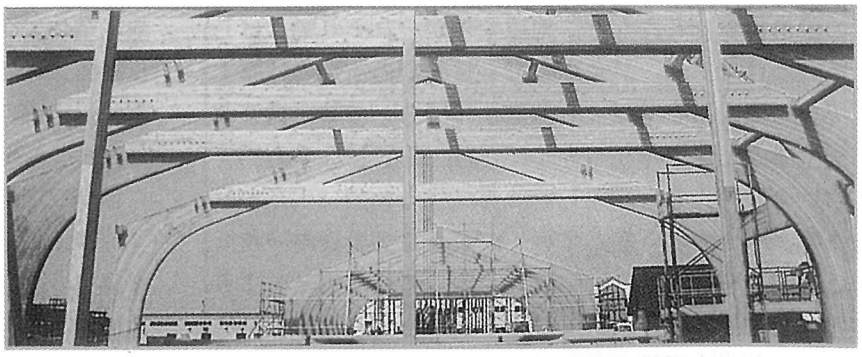
厚浜協組を起ち上げた時，どんな思想・信条を持つかということを考えた。地域の林業・林産業の将来がかかった協業化であるから，これらを立て直して終わりとはならない。新しい雇用や取引関係が生まれ，それらへの責任を負う社会的使命が伴うのである。今日まで地域の林業・林産業者は，裏山の森林をおこしたり，いわば森から自然発生的に生まれ，豊富な資源によって育てられてきた。それが，頼りにしている裏山の林力が低下し，有用広葉樹も枯渇してきたことで，多くの仲間が消えていった。森林と共に生き続ける宿命を持った人達が残り，そして協同組合が生まれてきた。そうした背景をふまえて，

「森林（もり）に生まれ，
森林に育ち，森林と共に生きる」

というスローガンを掲げることにした訳である。その後も森林資源の低質・小径化は続いており，資源の変



大断面木構造による集合住宅



大断面アーチ構造　スパン20m　1,300㎡　丸善木材㈱札幌工場

化に対応して地域も変わりつつある。しかし，どんなに厳しい資源であってもそこに森林がある。だからこそ互いに知恵を出し合いそれらを利用して，地域のために頑張っていこう。こうして多くの人達の励ましの言葉を頂きながら，地域の林業・林産業の生き残りをかけ，これからも一生懸命努力をしていきたい。

美瑛町／美馬牛公園内トイレ

浜中町／アゼチの岬トイレ

釧路湿原国立公園内サテライトステージ

阿寒町／白湯山展望台

（文責　北海道立林産試験場　成澤　直人）

入会をおすすめ下さい

●会誌「ウッディエイジ」の発行（会員は無料）

●文献・資料のコピーサービス（有料）

●講習会・講演会
木材加工技術に関する講習会（会員は無料又は優待会費）や講演会を随時開催しています。

●現場技術のハンドブック等の刊行（実費頒配）
「テクニカルノート」のほか，新しい技術や新製品に関する技術資料を逐次刊行しています。

●技術相談・試験依頼等の斡旋
林産試験場に対する技術相談・分析・試験等のお取りづぎをします。

北海道林産技術普及協会の主な業務